

近畿地方整備局 様  
淀川水系流域委員会 様

2007.10.30

奥西一夫\*

質問書：天ヶ瀬ダム再開発計画等における流下能力 $1500\text{m}^3/\text{S}$ の根拠

淀川水系河川整備計画原案61頁には「山科川上流において $1500\text{m}^3/\text{S}$ の流下能力を確保するため、以下の対策を実施する。」として、隠元地区の引堤及び河道掘削、塔の島地区の河道整備、天ヶ瀬ダムの放流能力増強、が挙げられています。

しかし、確保すべき流下能力  $1500\text{m}^3/\text{S}$  については、貴流域委員会のホームページを見ても全く要領を得ません。去る 10 月 25 日の「塔の島地区河川整備に関する検討委員会」委員への報告会を傍聴しましたが、そこでの報告と質疑・応答を聞いても、疑問はむしろ深まる一方です。つまり、国土交通省側からは、これは既に決まっていることだというような前提で話されるのに対し、何人かの委員から疑問が出されました。このままでは、流域委員会、あるいは上記検討委員会は何を議論しているのか、さっぱりわかりません。そこで疑問点を整理した形で質問します。委員会として答えられない場合は河川管理者から回答を徴して頂きたく存じます。

1. 洪水ピーク流量（10月25日には、それは山科川合流点の直上流での値であると説明されました） $1500\text{m}^3/\text{S}$ は河川整備計画原案の計画流量ですか。もしそうでない場合は $1500\text{m}^3/\text{S}$ はいかなる計画規模のもので、その計画規模は河川整備計画原案のそれと一致しますか。そして河川整備計画原案の計画流量はいくらで計画規模はいかなるものですか。また既往最大流量（昭和28年水害時？）はいくらですか。

2. 10月25日に説明された天ヶ瀬ダムから山科川までの残流域（但し山科川の集水域は含まない）と、天ヶ瀬ダムから宇治橋までの残流域はそれぞれいくらですか（国土交通省側は10月25日の報告会でこの質問に対する回答を、河川工学は精度が粗いという理由で拒否されましたが、これは精度の問題ではなく、論理性の問題です）。

3. 琵琶湖からの後期放流時に  $1500\text{m}^3/\text{S}$  の放流が必要と説明されていますが、その時に琵琶湖、大戸川などの主要流入河川、および残留域から流出する流量はそれぞれいくらかと計算されていますか（その合計が  $1500\text{m}^3/\text{S}$  となる筈ですが、そうでない場合は理由を教えてください）。またこれらの流量はピーク流量ではないはずですが、どのような考え方に基いて計算されていますか。

\*京都大学名誉教授，武庫川流域委員会委員